

家族内コミュニケーションを支援する デジタルストーリーテリングシステムの開発研究

Development of the System which Supports Family Communication by Digital Storytelling.

佐藤 朝美*

椿本弥生*

朝倉民枝**

Tomomi SATO

Mio TSUBAKIMOTO

Tamie ASAKURA

東京大学情報学環*

(株)グッド・グリーフ**

Interfaculty Initiative in Information Studies, The University of Tokyo* Good Grief Inc.**

〈あらまし〉 本研究の目的は、コンピュータ上で行う家族の物語作り(デジタルストーリーテリング)を通して、家族内コミュニケーションを活性化する環境を構築することである。先行研究から家族内コミュニケーションの望ましいパターンへと導くデジタルストーリーテリングシステムの要件を明らかにする。家族内で、語り手、聞き手、主題を変えながら多様な物語を展開し、それらの蓄積から振り返りを行えるよう活動を支援するシステムを構築する。その手掛かりとして、本年度は、家族の物語の作成状況について調査していく予定である。

〈キーワード〉 システム開発, 家族内コミュニケーション, デジタルストーリーテリング

1. はじめに

幼児期の子どもは、言葉の発達に伴い、様々な物語(Narrative)―自分の過去の経験、空想の話、誰かを主人公とした仮想の出来事など―を産出していく(秦野 2001)。特に5歳半頃から複数の認知機能の発達に伴い、物語行為が多くみられるようになる(内田 1996)。このような言葉の発達が著しい幼児期には、親しい身近な大人との対話が重要であるという(岡本 2005)。しかし、近年、父親の長時間労働だけでなく、母親の職業進出に伴い、家族内のコミュニケーションは希薄化している(厚生労働省 2004)。さらに、都市化、核家族化及び地域における地縁的なつながりの希薄化等により、家庭の教育力の低下が指摘されるなど、社会全体での家庭教育支援の必要性が高まっている。

そこで本研究では、家庭の教育力の向上支援を念頭に、物語作りを通じて家族内コミュニケーションの機会を充実させていくことを目的とする。特に、家族内対話のスタイルが確立途中にある未就学園児のいる家族を対象に、情報通信技術(ICT)の適切な支援環境を活用し、絵本の読み聞かせでは実現しえなかった、効果的なコミュニケーションを支援することを目指す。今まで ICT の活用を目を向けられていなかった家族内コミュニケーションという分野に、新たな利用法を示すという点でも意義のあるものと考えている。

2. 母子支援から家族支援へ

本研究は、「幼児の Narrative Skill 習得を促す親の語りの引き出し方の向上を支援するシステムの開発」(以下、「過年度研究」という)を継続・発展させるものである。Narrative Skill とは、いくつかの出来事の一つのストーリーにおいて関係づけ、意味づけてゆくと共に、ストーリー全体をより精緻なものにしていく力である。筆者は、Narrative Skill 習得に重要であるという、母親の語りの引き出し方の向上を支援するシステム“親子 de 物語”を構築した(佐藤 2009)。

開発したシステムは、母子で物語を作成し、Web カメラにより物語作成過程を録画、自身の録画ビデオだけでなく、他者のビデオを見ながら振り返りを行っていく Web アプリケーションである。評価実験の結果、システムでの活動を行っていくことで、子どもの詳細な語りを引き出す母親の言葉がけが向上することが示唆された。

本研究では、過年度研究において母子がコンピュータ上で行った Narrative 活動に、母親とは異なる言語環境を提供する父親(上村 2008)の参加を加えるものである。つまり、家族でデジタルストーリーテリング活動を行えるよう機能を発展させる。デジタルストーリーテリングとは、コンピュータを用い、静止画や動画などをナレーションでつなげて物語映像を制作する活動である。本研究では、父・母・子どもの家族各人がそれぞれ

役割を持ち、ストーリーテリングの活動に参加していくようシステムを構築する。過年度研究では、録画ビデオを蓄積し、母親が1人で振り返る活動を支援する機能であったが、本システムでは、録画ビデオを素材に家族が対話を重ね、相互理解を深めていく機能を実現する。

以上を踏まえ、本研究の目的を以下に整理する。

- 1) デジタルストーリーテリングの活動を行い、作品を共有しながら、家族内コミュニケーションを活性化させるシステムを構築する
- 2) 構築したデジタルストーリーテリングのシステムを家族に提供し、その効果について評価・検証を行う

3. システム構成の検討方針

先行研究では、家族内コミュニケーションのレベルやパターン、形式や型、回路、プロセスなどに関して明らかにされている(佐藤 1986)。家族各人が自己開示に徹し、言いたいことを一般化せず、他人との比較を行わず発言し、聞き手は相手のメッセージをきちんと受け止めた事を示すことが重要であるという(野口 2009)。幼児の語りの詳細を引き出す母親の特徴や、子どもの語り方や考え方への影響についても明らかにされている(Fivush 2007)。これらの先行研究から望ましい対話スタイルを検討する。

また、機能に関しては、デジタルストーリーテリングを学習に適用した授業実践などから検討する。主に欧米では、自己表現だけでなく、語ることによる理解の深化の効果から、多様な展開が行われているので、参考としたい。

4. 今後の予定

本年度は、家族の現状を調査していく予定である。家族内コミュニケーションのスタイルに偏りがあると、子どもが青年期に入った際、問題が表出する場合があるという(佐藤 1986)。そこで、本研究では、スタイルが確立途中にある未就学園児のいる家族を支援することとし、どのような状況にあるのかについて調査する。具体的には、実験協力者の家族特性をアンケートにより収集すると同時に、実際に物語を作る活動を行ってもらい、対話データを収集する。家族の特徴と対話スタイルの特徴の関連性について、実際のデータから分析を行う。

その活動は以下のような内容を想定している。同じテーマ(家族に起こる事件)について、父・母・子が、各個人でデジタルストーリーテリングの活動(物語映像とナレーション録画映像)を行う。その際、物語の登場人物の台詞として自己を投影してもらい、作成した物語は随時記録され、その後、父母子はそれぞれが作った物語を閲覧し、感想やコメント、質問等をフィードバックする。最後に家族全員で、作品の差異やお互いのフィードバックを確認し、作成時の様子や思い、背景などの種明かし等からお互いの考えをきちんと受け止めていく。

以上の調査データを検討することにより、家族内コミュニケーションをデジタルストーリーテリングの活動を通して行う支援環境の要件を導き出す予定である。それらのシステム要件をもとに、システムを構築していく。家族内コミュニケーションにおける ICT 支援の可能性について明らかにしていきたい。

謝辞

本研究は、平成 22 年度科学研究費補助基盤研究(C)(課題番号:22610004、代表:佐藤朝美)の助成を受けている。

参考文献

- Fivush, R. (2007) Maternal Reminiscing Style and Children's Developing Understanding of Self and Emotion. *Clinical Social Work J*, (35) pp37-46.
- 秦野悦子(編集)(2001)ことばの発達入門. 大修館書店, 東京
- 厚生労働省 平成 16 年度全国家庭児童調査
- 野口裕二(2009)ナラティブ・アプローチ. 勁草書房
- 岡本夏木(2005)幼児期. 岩波新書, 東京
- 佐藤悦子(1986)家族内コミュニケーション. 勁草書房
- 佐藤朝美(2009)幼児の Narrative Skill 習得を促す親の語りの引き出し方の向上を支援するシステムの開発. *日本教育工学会論文誌*, Vol.33(3) pp.239-249.
- 上村佳世子(2008)30ヶ月児の親子三者間相互行為への参加と親から提供される言語環境, *発達心理学研究* 19(4), 342-352.
- 内田伸子(1996)子どものディスコースの発達. 風間書房, 東京